

その3

「お嫁入りの段」

つばめ大夫師匠のおかげで義太夫にめざめてから、それまで辛かったお稽古がどんどんおもしろくなつていきました。今回のチラシに使われている写真はその頃(十八歳)のもので、上野・本牧亭に、二回目に出演した時のものです。隣が鶴澤三生。このときには思つてもいませんでしたが、その後、私の義母となり、一生の縁で結ばれることになります。

三生に初めて会ったのは、故郷の淡路で見台開きをした十三歳くらいのとき。このとき私の師匠春駒が自分の高弟である竹本越駒を呼んだのですが、越駒の三味線をつとめていたのが三生で、見台開きで私の三味線を弾いてもらい、その後、東京でも三生がつとめてくれるようになりました。

当時、私は春駒の内弟子で大阪にいましたので、本牧亭に出ているときは、親戚の家に泊めてもらったり、浅草にあつた二代目の綾之助師匠のお宅に泊めていただいたりして、そこから湯島・神田明神裏の妻恋坂にあつた三生のところに稽古に通っていました。夜公演があつて昼間も稽古ですから、三生の家に泊まることもありました。三生はトンカツをあげるのが得意でした。私は関西なので肉と言えば牛。トンカツを食べたのは三生の家が初めてでした。

三生に息子がいることは知っていましたが、会ったこともなかったんです。それからしばらくして、二十二歳頃の本牧亭の公演だったでしょうか、竹本越道師匠のご主人と三生と一緒に神田のお鮎屋に連れていってもらった

とき、そこで越道師匠のご主人が「この人をお嫁さんにもらうといいですよ」と三生に言ったら、「この人は、春駒が離さないからダメですよ」と三生が答えた。そんなこともありました。

三生は、実はものすごい大酒飲みだったんです。普段はとってもいい人なんですけど、そのもやもやが出るのか、夜になるとお酒飲んで、もろ肌脱ぎ、立膝ついて……とおそろしいことになるんです(笑)。だから、よそからきた人にはとても嫁はつとまらない。私のことは十三、四から知っていますから、娘のように思われていたのかもしれない。三生が春駒に結婚の話をしたところ、春駒は、私が義太夫を続けられるのならお嫁に行つてもよい。ただし自分も一緒にもらつてくれと。三生に、それを受け入れてもらい、春駒と一緒に結婚入りのことになりました。私が二十四歳のときです。

それまではとにかく義太夫に夢中で、それに、こんな仕事をしていては、もらつてくれる人がいないのでは……と思つていましたから、結婚のことをそんなに真剣には考えていませんでした。でも、お稽古に行くと、当時関西では、正式な結婚ではなく、どなたかのお世話になつている方が多かったんです。子供ができて認めてもらったとか、学校に入るため戸籍謄本をとつたら子供に知られて、子供にどういふことかと問い詰められたとか、お稽古に行くときという話を涙ながらに話している方たちを、よく見かけたんです。それを聞いて、これはいか

んなあ、私は誰とであろうと、正式に結婚しないといけないな、と思つていました。三味線の豊澤仙平師匠のご主人が外国航路の船員さんで、何年かに一度しか帰つてこないというのを聞いて、結婚するなら、船員さんがいいなあ、なんて思つたりしていましたけれど(笑)。

私の場合は、三生がすべてお膳立てしてくれただけで縁ができたのですが、そのいきさつを当時、私も、のちに主人となる三生の息子も知りませんでした。本牧亭の公演に行っている間にすべてが決まり、三生が神田明神に行つて日にちまで決めてきた後、聞かされたのです。それで、主人は家出するだのなんだの、大騒ぎになつたそうです。

そういうことから、主人とは付き合うどころか、長く話をしたことすらありませんでした。結婚が決まつてから、いと一緒にに行くスキーに、私を連れていきなさいと三生に言われ、スキーウェアの買い物に連れて行つてもらったのが、はじめてのデートのようなものです。私は生まれてはじめてのスキーだったのに、主人と一緒に山の上まで連れていってくれただけで、シャツと滑り降りて行つてしまい、面倒を見てくれたのは、いとこでしたけれど(笑)。

結婚式は、あくる年、二十五歳の五月十日です。神田明神に大勢の義太夫関係者を呼んでいましたが、時間になつても肝心の新郎が来ない。神主さんに「どうするんで

すか」と聞かれて、三生が「もうよろし。始めてください」と。こればかりは、さすがに悲しかったです。蚊帳の外ですべて決められた主人も気の毒だけれど、自分もかわいそうだなとつくづく思いました。こりや、すつぽかすんだわ、と思ったところで、主人がひよっこりやつてきました(笑)。

それから、主人と三生、春駒との4人での生活が始まったのですが、三生にしてみたら春駒は私の師匠ですから、窮屈で仕方ない。春駒は三生のやることなすことが気に入らない。春駒が姑で、三生が小姑のような感じでしたから、普通のお嫁さんではとてもとまらなかつたでしょう。

淡路の生みの母と、芸の母・春駒、そして義母の三生。私には三人の母がいます。このなかでどの母が一番良かったかというと、三生です。私を頼ってくれて、本当によくしてくれました。私の二人の子供たちもすごく可愛がってくれました。孫をめっちゃ可愛がりする人で、飲み物や食べ物をたくさんあげてしまうので、三生がいるときは子供たちを置いて出かけられないくらいでした。

春駒と三生を最後の最後まで、充分に見て差し上げられたということ、これは本当に、恩返しできてよかったと思っています。

今回、語らせていただく『恨鮫鞘「無筆書置の段」』、通称「鰻谷」は、春駒に教わりました。下の娘が小学校に入った頃ですから、昭和四十八年頃でしょうか。その頃は湯島から秦野に移って、三生、春駒と一緒に暮らしていました。夏休みに一週間くらい下田に避暑に出かけましたが、子供たちが遊びに行っている間にお稽古してもらったのを覚えています。昭和四十九年、本牧亭で初めてつとめたときは三生に弾いてもらいました。

二月に語らせていただいた『太平記忠臣講釈』の「書置の段」と違って、「鰻谷」のおつまは無筆(読み書きのできない人)で、口伝で教えられた娘・おはんによつて、書置(遺言)が語られます。いま苦心しているのは、おはんの子役の声で、この演目は子役の喋るところが長いんですね。本牧亭で四十年前にやったときは苦にならなかつたのが、いまはどこから出そうかと苦労しているところです。年とともに乙(低音の声)は開けてくるのですが、逆に子役の声は出なくなりません。地合(詞以外の旋律をつけて語る描写的な部分)はいいのですが、地合より一本、調子が高い詞に苦労しますね。八郎兵衛は思わぬことが起きて焦っているのです。関西弁をはやいテンポで、かつ、わかりやすく言わなければならぬ。約一時間という一曲の流れのなかで、詞のテンポをどういうバランスで組み立てるのが難しいところです。

これまでKAATで語らせていただいた『和田合戦女舞鶴』『太平記忠臣講釈』は時代物でしたが、今回は世話物。世話物は時代物よりしんどいんです。おつまも、武家の妻とは違う役作りが必要なんです。私は涙腺が弱いので、おつまがかわいそうだなと思うと、こりやつてお話ししているだけで、涙が出てきちゃいます。

見たり聞いたりしてわかることもあれば、実際に体験してわかることもあります。男性の太夫でも、お産の苦しみなど女性しか体験できないことを表現するのですから、実際に自分が親になり、母を看取って、どんな年を重ねるうちに、より深く親と子の情を感じ、表現できるようになつたかもしれないと思います。



【写真】竹本駒之助 18才 本牧亭にて 三味線・鶴澤三生

